

## 倉田 稔著『若きヒルファディング』

(丘書房 1984年 230頁)

黒 滝 正 昭

## I

本書は、著者の2冊目の著書<sup>1)</sup>で、1972年から82年までの間に発表された9論文が土台となっている。「あとがき」に著者はこう書いている。「〔私は〕3年余りの欧州滞在をもとに、事実と資料を集めた。本書は、いわば足で書いたものであり、今のところ、若きヒルファディングに関する、世界で最も詳しい伝記的調査である。……本書は、主に私の30代の作であり、3分の1を海外で身体を酷使して作りあげたが、40才に入った私は、もうこういう調査は肉体的理由からできそうにもない。私以上の調査は、欧米人なら地理的に容易であろうが、日本人なら、40才前の人でないとむずかしいであろう」(197頁。〔 〕は引用者。以下引用文は、正誤表によって訂正済みのものを用いる。その他の自明の誤植は、とくに断らずに訂正してある)。

本書の特色は、この言に尽されている。Hilferding に関する未発掘の資料と文献を求めて、欧米中を歩き回った著者の多大な労苦<sup>2)</sup>の結晶を、われわれは、数時間で利用できるように与えられているのである。本書が、Hilferdingの理論的研究にとって代るものでないことは言うまでもないが、理論的な研究を具体化・発展させるために不可欠の、伝記的事実構造が、著者によって初め

原稿受領日 1985年4月23日

- 1) 第1冊目の著書は、『金融資本論の成立』青木書店 1975年。
- 2) その一端は、倉田「ヒルファディング2世会見記」(『現代史研究』28, 1976年5月)が生き生きと伝えている。

て与えられたことの意義は、どれほど評価しても評価のしすぎにはならないであろう<sup>3)</sup>。

このような書物を批評するためには、評者もまた、自らの追調査・再確認をもって、力の及ぶかぎり批判的に吟味し、著者の成果を何がしかでも発展させることは義務である、と思われるのである。

## II

本書は、序章と終章を含め、全体で11章から成っている。

### 序章

#### 第1章 生いたち

#### 第2章 学生社会主義運動

#### 第3章 結婚

#### 第4章 オーストロ・マルクシズム

#### 第5章 ストライキ論争

#### 第6章 ドイツ社会民主党へ

#### 第7章 編集局員

#### 第8章 第1次世界戦争

#### 第9章 ハプスブルク帝国の軍医

### 終章 結論的考察

さらに巻末には、「ヒルファディング著作目録補遺」、「欧文献目録」、「邦文献目録補遺」、「アムステルダム社会史国際研究所所蔵ヒルファディングの未発表手紙一部目録」が附され、著者によるこれまでの Bibliographie が新たに補完又は再録されており、最新の情報が与えられている。

序章で簡単に「オーストロ・マルクシズム」の名称の起源等が述べられた後、第1章で、Hilferding の出生からギムナジウム時代までが扱われる。ここで

3) Ruud Vlek は、その Hilferding に関する学位論文(1980)の中で、著者の独文のみならず、和文の論文も、多数利用している。また Tom Bottomore も、『金融資本論』英訳本(1981)の序文の中で、明示せずに著者の成果を利用している。

は、W. Häusler, S. Zweig, usw. に拠って、当時の Wien のユダヤ人社会が詳細に明らかにされ、その後著者の独自調査が始まる。

すなわち著者は、Israelitische Kultusgemeinde に提出された Rudolf の出生届、Rudolf が Wien 大学入学時に提出した Nationale (個人調書)<sup>4)</sup>、Wiener Rathaus に提出された Rudolf と Margarethe の結婚届、さらに Rudolf の次男 Peter Milford 氏からの聴き取り等、全く新たな資料によって、Rudolf の父 Emil Hilferding の職業が、Privatbeamter、具体的には Hauptkassier der „Allianz“ [古いイタリア系の大保険会社の名前] であったことを確定したのである。これによって Stein-Gottschalch の「商人説」は訂正され<sup>5)</sup>、また結論的には正しかった Dombrowski-Bourdet 説に対しても、資料的裏づけが与えられ、さいごに会社名及び職名の確定は、著者が初めてである。

さらに Rudolf のギムナジウム卒業の際の成績表 Zeugnis (1894年9月21日付) が、やはり著者によって初めて紹介された。これによって Rudolf のギムナジウム時代の勉強状況が、「歴史」の再試合格まで含めて具体的に明らかにされ、Dombrowski の所謂「中位の生徒」説<sup>6)</sup> の正しさが裏づけられた。

ただ、「ヒルファディングの家系図」(23頁)中 Rudolf の両親の生没年; Emil (1852-1905), Anna (1854-1909), 最初の妻 Margarethe の母: Emma Breuer, 後妻 Rosa の生没年 (1884-1959) は、すでに明らかにされている<sup>7)</sup> のであるから、補ってほしかった。

4) 著者はこれを「学籍簿」(25頁)と訳し、別の箇所では「履習届」(54頁)と訳しているが、疑問である。

5) ただし後の人名辞典において Gottschalch の執筆した項 „Hilferding, Rudolf“ においては、„V Emil (1852-1905), …Kassier e. Versicherungsges. in W.“ まで調査されていたことは、記録されねばならない。vgl. Neue Deutsche Biographie, Bd. 9, Berlin 1972, S. 137.

6) Johannes Fischart, Neue Politikerköpfe XXVI. Rudolf Hilferding, in: Die Weltbühne, 20. Jahrg., 2. Halbjahr, 1924, Nr. 46, S. 730. Nachdruck, Königstein/Ts. 1978. Gottschalch は、Dombrowski のペンネームを、誤って Johann Fischart としている。著者も「欧文献目録」(204頁)では、それを踏襲している(ただし、本文部分では、正しく表記されている)。

7) 注5) 及び Biographisches Handbuch der deutschsprachigen Emigration

第2章は、Hilferding の Wien 大学学生時代である。著者はここでは、Karl Renner に拠って<sup>8)</sup>、当時の学生社会主義運動と Hilferding の関わりを明らかにしている。しかし、前述ギムナジウムの Zeugnis の日付と Renner の記述とをつき合わせることによって、Hilferding が Renner 等の社会主義学生サークルに加入したのは、従来言われてきたように大学に入ってからではなく、すでにギムナジウムの生徒の時代であることを、著者は確定している。そして「おそらく1893年3月末から4月末までの間」、年令15歳8ヶ月前後、と、非常に精度の高い推定を試みている。

ただし著者は、上記 Renner 等のサークルが Stein の所謂 Der Sozialistische Studentenbund<sup>9)</sup> のことであり、それを Renner はただ Zell と称しており、正式名称は不明である、またそのサークルが集まっていたガストハウスの名称が Der „Heilige Leopold“ である、と述べている(40-41頁)。これは誤解ではないだろうか？何故なら Renner は、ガストハウスの名称は „Zum heiligen Leopold“ であって、そこからとったサークルの名称が Der „Heilige Leopold“ であることを述べているからである(S. 246)。したがって、Hilferding の加入したサークルの正式名称が Der „Heilige Leopold“ であると考えてよいのではなからうか？さらに Renner は、このサークルが、もう一つのより古い、また相互に対立関係にあった社会主義学生グループ „Veritas“ と、V. Adler 等の斡旋によって合同し、〔1895年に〕 „Die Freie Vereinigung sozialistischer Studenten an der Wiener Universität“<sup>10)</sup> が創立され、Max Adler が初代議長となっ

nach 1933, Bd. I, München/New York/London/Paris 1980, S. 295.

8) Karl Renner, An der Wende zweier Zeiten. Lebenserinnerungen von Karl Renner, Bd. I, 2. Aufl., Wien & Zürich 1946.

9) Alexander Stein, Rudolf Hilferding und die deutsche Arbeiterbewegung. Gedenklätter, Hamburg o.J., S. 5.

10) Bottomore と Vlek は、Renner に拠っているにもかかわらず、不正確に、それぞれ „Freie Vereinigung Sozialistischer Studenten und Akademiker“, „Freie Vereinigung von Sozialistischer Studenten und Akademiker“ と書いている。vgl. Austro-Marxism, with an Introduction by Tom Bottomore, London 1978, p.9; Ruud Vlek, Van „Finanzkapital“ tot Finanz-

た、と述べている (S. 278f.)。これが Stein のいう上記 Studentebund であり、Sweezy のいう “The first student socialist society”<sup>11)</sup> である、と考えられないであろうか？ そうすれば、著者が「誤り」(42頁) と断定する Sweezy の記述 “[Hilferding] organized, along with Otto Bauer… and others, the first student socialist society” (p. xv. 下線, [ ] は評者) も誤りとはいえなくなるであろう。〔以下 Hilferding を Hil. と略〕。

また Milford 氏が語ったこと、「ヒルファディングは、この学生社会主義サークルの首領 Präsident になった」(49頁) という「サークル」とは、この „Freie Vereinigung“ の方を指しているのではないだろうか？

この他著者は、前述 Nationale によって、Hilferding が当時なお、「宗教」欄に „mosaisch“ と記入していること、また1894/95冬期ゼメスターから99夏期ゼメスターまで、各ゼメスター毎に Hil. が履習した科目をすべて明らかにし（それによって Hil. が登録・受講した経済学の科目は、講壇社会主義者 Philippovich の「国民経済学演習」のみであることが確定）、さらに Wien 大学卒業生名簿によって、Hil. が医学博士になったのが1901年3月27日であること、最後に、Wien 大学での聴き取りによって、同大学医学部では1850年頃から、Dr. 論文制度を廃止し、そのため、Hil. の学位論文は存在しないことなど、重要な伝記的事実を、次々に明るみに出している。

第3章では Hil. の結婚が扱われるが、1904年5月9日、Rudolf 26歳、Margarethe 32歳で結婚、というのは、あらゆる意味で常識を破ったものであったことが、明らかにされている。ここではさらに、結婚届に Rudolf が「一般開業医」 („prakt. Arzt“) と記入していることを著者は発見して、von Krosigk-Gottschalch の „Kinderarzt“ 説<sup>12)</sup> をくつがえした。最後に、こ

minister, Doktoraal-skriptie, Amsterdam 1980, p. 7.

11) Karl Marx and the close of his system by Eugen von Böhm-Bawerk & Böhm-Bawerk's criticism of Marx by Rudolf Hilferding. Edited with an introduction by Paul M. Sweezy, New York 1949, p. xv.

12) Lutz Graf Schwerin von Krosigk, Es geschah in Deutschland, 3. überarbeitete Aufl., Tübingen u. Stuttgart 1952, S. 79; Wilfried Gottschalch, Strukturveränderungen..., Berlin 1962, S. 14.

の結婚届で、初めて Rudolf は「無宗教」と記入し、出生以来のユダヤ教をここで捨てたことが、確定されている。

### III

第4章から、いよいよ Hil. の本格的理論活動の時代に入る。

まず Hil. の Kautsky (以下 K. と略) 宛手紙によって、Hil. の Böhm-Bawerk 批判論文の原稿が、1902年4月23日までには、一応完成していたこと、それがどういう理由で „Neue Zeit“ に掲載されなかったかを、追究している。

そのさい K. からの返事を、「色よい返事」と解した長坂聡氏<sup>13)</sup>を批判して、著者は「断り状であった」(71頁)と断定しているが、それについては評者は、多少の疑問をもっている<sup>14)</sup>。また著者は、この点に関する Bourdet 説を、“Hil. 自身が自分の論文を「不毛」(stéril) とみなして自発的に N. Z. に載せなかったという主張である”，と解した上で、これを「誤り」としている(72頁)が、これは、Bourdet の趣旨を誤解したものではなからうか?<sup>15)</sup>

著者は、Hil. の Böhm 批判論文には「『金融資本論』に展開される理論の萌芽を見出すことはできないし、その必要もない」(82頁)と述べているが、かつて著者は、この論文における①唯物史観矮小化の傾向、②価値の量的問題、

13) 長坂 聡「ヒルファディングのカウツキーあての手紙」、『唯物史観』vol. 5, 1967, 97頁。

14) というのは、1902年11月にも „Neue Zeit“ の Redaktion [Kautsky] は、  
„Auch wir hoffen, daß unsere Raumverhältnisse es uns bald gestatten, diese etwas umfangreiche Arbeit, die wir schon vor einigen Monaten acceptiert, zum Abdruck zu bringen.“ と述べているからである (N. Z., Jg. 21, 1902/03, Bd. 1, Nr. 7, S. 216.)。

15) Bourdet の文脈は、“Certes, il croit toujours que la critique de la critique est elle-même critique, puisqu’il publiera bientôt son Anti-Böhm-Bawerk”, mais, dès sa seconde lettre à Kautsky, il juge «stérile» la critique de Böhm-Bawerk et pense qu’il vaut mieux étudier les phénomènes que Marx ne connaissait pas, …” (Rudolf Hilferding, Le Capital Financier, Paris 1970, p. 20. 下線は評者) となっているからである。

交換関係の一面的重視，という弱点を挙げ、「これらの諸点は、『金融資本』の初章において明瞭にあらわれて、ヒルファディングの弱点となる」<sup>16)</sup>、としていた。これは「萌芽」を意味しないのであろうか？

最後に著者は、Hil. の Wien 大学在学中には、Böhm-Bawerk は同大学にはいなかった事実を明らかにして、Hil. が学生時代に Böhm セミナールに参加したという「伝説」を粉砕している。Hil. がそれに参加したのは、すでに大卒後、Böhm 批判論文公刊後の1905/06年で、当時在学中の O. Bauer に誘われたものと推定している（89-90頁）。

第5章では、Hil. の「ゼネラル・ストライキ」論（1903）と「大衆ストライキ」論（1905）を含むストライキ論争時代が扱われる。

Hil. の「ゼネラル・ストライキ」論の意義を、著者は、①社会民主主義陣営で最も早い、ゼネラル・ストライキ一般の肯定論で、当時の Rosa の見解と比しても、一步進んだもの、②1905年に SPD の公式見解となったものは、Hil. のこの見解とほぼ同一、の二点を挙げている（101頁）。これに関連して、著者は、Hil. のこの論文に附された „Neue Zeit“ 編集部の注に注目して、これが単に個人論文であるだけでなく、翌1904年8月に開かれた第二インター・Amsterdam 大会での「ゼネ・スト」討議のために、„Neue Zeit“ 誌が公式に提供した、問題提起論文でもあったことを明らかにしているのは、重要である。

Hil. がこの論文を K. に送った際に附した長い手紙（31. August 1903）を著者は紹介して（99-100頁）、Hil. の意図をより明瞭ならしめているが、その手紙の引用文中、「その瞬間に普通選挙権が即刻危険になると思えたとき、関税率〔の問題〕を抽象化しながら、これを書き下ろしました」（100頁）という文章は、意味不明である。著者が解読した、この部分の原文は、„Ich schrieb ihn dann während der Abstraktion gegen den Zolltarif nieder, als es einen Augenblick scheinen konnte, als wäre das allgemeine

16) 倉田「若きヒルファディング—そのウィーン時代—」, 季刊『社会思想』3-2, 1973年8月, 447頁。

Wahlrecht unmittelbar gefährdet.“（下線は評者）となっている<sup>17)</sup>。この „Abstraktion“ は解説の誤りで、正しくは „Obstruktion“ である<sup>18)</sup>。評者による訳をあえて示すと、「その後〔1902年12月〕、あの関税率〔案〕に反対する議事引延ばし〔闘争〕の最中、すなわち、ある瞬間には、普通選挙権が直接危機に曝されるようなことが起り得た、そういう時に、この論文を書き下ろしました」となるであろう。

Hil. の「大衆ストライキ」論の方は、著者によれば、ドイツが、仏・墺と異なっており、社会主義の前夜にあるという「甘い見方」に捉われて、「大衆ストライキ」はドイツでは、革命の手段でしかありえない、という、一面的な見方に陥っている。これに対して Rosa は、1905年のロシア革命の経験をふまえて、自然発生的に生ずる大衆ストライキと党の政治的指導との関係、正しい戦術による闘争の発展を通じて、それは、革命の手段となりうることを明らかにすることによって、Hil. の把握を追いこし、「最も深い問題を衝いた」（115頁）というのである。

Hil. は、この第二論文以降、ストライキ論を離れ、『金融資本論』の執筆に没頭していくことになる。

#### IV

第6章では、Hil. の Wien 時代から Berlin 時代への転化がどのような経過で行われたかが、公刊、未公刊の手紙によって、興味深く描き出されている。

第7章では、„Vorwärts“ の記事によって、党学校における Hil. の講義担当科目が明らかにされている。それが翌1907年10月、Rosa に引き継がれ

17) Minoru KURATA, Rudolf Hilferding. Wiener Zeit. Eine Biographie (III), in: 小樽商大『商学討究』30-1, 1979年7月, 63頁。

18) 保住敏彦氏は、原文を示していないが、「関税法に反対する（議会で議事妨害の期間中に…）」と訳している（同氏『『金融資本論』執筆時のヒルファディング (I)』, 愛知大学『法経論集』経済・経営篇I, 第97号, 1981年11月, 146-147頁）ので、この点の解説は評者と一致しているようである。



た経過、Hil. がその後 „Vorwärts“ 編集局に入り、„Neue Zeit“ の方も手伝ったこと等詳述されている。さらに **Троцкий** の Hil. 宛手紙<sup>19)</sup> と自伝を照合しつつ、両者の交流を、興味深く描いている。

ついで『金融資本論』に関する叙述がくる。著者はここで、1910年前半に出版された同書の初版には、二種類の版があったことを、初めて具体的に明らかにしている。一つは、„Marx-Studien“, Bd. 3 そのものであり、もう一つは、同 Bd. 3 から、T. Grigorovici 論文を省いたもの、いわば抜刷としての、『金融資本論』のみの版である<sup>20)</sup>。さらに P. Kulemann に拠って、この二つの版を合計した普及部数が、1911年11月までに、888部であることを紹介しているのは、いかに著者が、細心の注意をもって研究文献を探索し、自らの調査を補完しているかを、よく示している。

ただし著者が、Hil. は「生涯無修正のまま、再版を出しつづけている」と述べ、さらに脚注で、「第2版1920、第3版1923、第4版1929」と述べている(140頁)のは、誤りである。「第2版1920」はその通りである<sup>21)</sup>が、1923

19) この手紙の存在は、既に Bourdet が伝えていたが、内容を詳しく紹介したのは、著者が初めてである。なお Bourdet は、IISG がこの手紙の出版準備中である、と報じていたが、今だに未公開である (Le Capital Financier, p. 11, n. 3)。

20) 評者は、この初版の抜刷版の存在を知らなかった。改めて注意してみると、例えば Bernstein は、この抜刷版を挙げていた。Bernstein, Eduard, Die moderne Finanz im Lichte der Marxschen Theorie, in: Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, XXXV. Bd., 1912, S. 219, Anm. 1)。〔こう書いた後で、Hil. が、1904年10月 „Neue Zeit“ に発表した論文の脚注において „Karners Studie ‚Die soziale Funktion der Rechtsinstitute‘ … (S. ‚Marx=Studien,‘… 1. Band, 2. Heft.) と書いているのを見出した (a.a.O., 23. Jahrg., 1904-05, 1. Bd., Nr. 4, S. 108, Anm. 1, 下線は評者)。これによると „Das Finanzkapital“ も、Bd. 3からの抜刷というより、Bd. 3の 1. Heft として、元々独立に発行されたものが、後に Bd. 3として合冊されたのかも知れない。〕

21) 第2版への序文はないが、扉に „Zweite Auflage“ と明記してあり、また „Marx-Studien, Dritter Band“ usw. の文字は削除されている (『マルクス経済学講座2 現代帝国主義論』有斐閣 1963年, 0頁; 飯田・鈴木・野田・高山『ヒルファディング金融資本論入門』有斐閣新書 1977年, 1頁, の写真参照)。さらに本文の頁や行も、初版とは全くずれている。

年版, 27年版は, 再び „Marx-Studien“, Bd. 3 からの抜刷版で, ただ „Wien 1910“ の代りに, それぞれ „Wien 1923“, „Wien 1927“ となっているだけである。中味も, 頁, 行, 誤植に至るまで, 初版と全く同一であり, 実質的に初版の覆刻版である。したがってこれを, 「第3版」, 「第4版」とよぶことはできない。<sup>22)</sup> さらに2. Aufl., 1920 では, いくつかの文体上の修正がなされているので, 「生涯無修正」であったわけではない<sup>23)</sup>。

Ленин との対比で注目されるのは, 著者が, 『金融資本論』は, ……その独創性において, レーニンの『帝国主義』にまさっている。レーニンは, その書の基本的経済理論をヒルファディングから学んでいる(140頁)と述べていることである。著者は, この文章に脚注を附して, 前著『金融資本論の成立』の参照を求めているが, 評者が読みとりえた限り, 前著においては, 少なくともその独創性においてレーニン『帝国主義』は, 『金融資本論』に優るとも劣りはしない, というのが著者の見解であったので, 今回の新しい規定の中には, 著者自身の理論的見解の変化が含まれているように思われる。

なお Rosa が, Hil. の『金融資本論』を故意に無視した(139頁)というのは, 結果的にその通りであるが, 少なくとも1911年3月末には, 彼女は, それを書評する意志をもっていた<sup>24)</sup>ので, それが何故実現しなかったかについては, 今後さらに追究せねばならないであろう。その際, 著者が前著の「補遺」<sup>25)</sup>としてとり上げた, Rosa の『資本蓄積論再論』における Hil. 批判部分の執筆時期も問題になるであろう<sup>26)</sup>。

22) この点は既に, 細川元雄「わが国のヒルファディング文献史の一駒——福田徳三と河上肇——」, 名古屋学院大学附属図書館月報『品野台』Vol. 5, No2, Apr. 1972, 34-35頁で正しく記述されている。

23) 詳細は別稿で扱う予定。

24) Brief Rosas an Kostja Zetkin vom Ende März 1911, in: Rosa Luxemburg Gesammelte Briefe, Bd. 4, Berlin 1983, S. 41.

25) 倉田『『金融資本論の成立』補遺』, 小樽商大『人文研究』, 第51輯, 1976年3月。

26) この執筆時期については, Dietz 版 Rosa 全集, Bd. 5では, 何の説明もない。

## V

第8章からは、本書の最後の部分、すなわち第一次大戦時代に入る。章末で Hil. の手紙によって、Hil. が1915年4月29日までには、すでに召集を受けて Berlin を離れ、Wien に戻っていたことを明らかにして、Stein の記述を訂正している(168頁)。以後 Hil. は、オーストリア・ハンガリー帝国の国民軍医の任に着く。

第9章に入ると、大戦中の Hil. の K. 宛手紙が、ふんだんに紹介・分析されている。この大戦中の手紙は、Hil. の思想史的研究にとって、とりわけ重要な意義をもっているにもかかわらず、Bourdet も Vlek も、全く部分的に、不十分にしか利用していない。したがって、ここでも著者は、国際的な Hil. 研究の視野を、一気に拡大したのである。これらの手紙は、内容が重要であればあるほど、一層慎重な吟味を要する。したがってここでは、著者と解説・解釈を異にする点については、評者による解説文を示しつつ、試訳を対置し、今後の検討に委ねたい。

①まず1916年7月1日付(KDXII 611)<sup>27)</sup>

「ひょっとすると、金融資本論の経済政策篇から歴史を増補・修正して、小冊子として刊行するかもしれないのです。私には材料がすべてうまく入手できるかどうか、すなわち、そこに資本家的植民地〔論〕を加えるべきかどうか、どうもわからないのです」(172頁。下線実線は原文、破線は評者。以下同様)

原文： „Eventuell könnte man dann die Geschichte etwas modifiziert, vermehrt um einiges aus dem Wirtschaftspolitischen [sic] Abschnitt des Finanzkapitals als Brochure herausgeben. Freilich weiß ich nicht, ob sich mir hierher alles Material werde verschaffen können, namentlich da noch ein Kapitel über Koloniales dazukommen müsste“

27) 著者は脚注で、同一番号のものに、さらに7月5日付、7月12日付の文章がある、と述べている(172頁)が、前者は Hil. による追伸、後者は Fritz Adler による追伸である。

(下線実線は Hil.)

この手紙は、N.Z. に掲載された Hil. の連載論文 „Handelspolitische Fragen“ の原稿に附されたもので、その内容及びそれを N.Z. に発表することについての K. の判断を求めたものである。„die Geschichte“ は、この場合 „die Sache“ の意味であろう。

試訳：「場合によっては人は、その後〔N.Z. に掲載された後〕この物件〔論文「貿易政策の諸問題」〕を、少々改訂して、金融資本論の経済政策の篇から若干部分を増補し、パンフレットとして刊行することもできるでしょう。勿論私には、当地ですべての材料が入手可能か否かは分かりません。というのはとりわけ、植民地の事柄に関してもう一章、付け加わらねばならないからです」(〔 〕内は評者。以下同様)。

ここで Hil. が『金融資本論』第5篇の増補を考えていたことが分る(172頁)という著者の判断は、誤りではないだろうか？

②同じ手紙の続く部分：「あなたは、諸経過を悲観的に見すぎていると思います。…党委員会へ派遣する2つの反対派グループのベルリン代表者の事件は、まったく正しい示威行為で、今は、方向性の多様さが本質的なものではありません。これを拒絶することは、健全な理性を発揮することをやめることであり、ローザ〔・ルクセンブルグ〕に利用される言質(Denkzettel)になるのです」(172頁-173頁)。

原文：„Ich hoffe, Sie sehen die Vorgänge etwas zu pessimistisch. … Das Vorgehen der Berliner Vertreter beider Oppositionsgruppen in den Ausschuss zu schicken eine ganz richtige Demonstration, dass die Verschiedenheiten der Richtung jetzt nichts Wesentliches. Zugleich zeigt die Ablehnung der Beitragssperre von gesunder Vernunft u. ist ein nützlicher Denkzettel für Rosa.“

試訳：「貴方が諸経過を、悲観的に見すぎていることを、私は願っております。…二つの反対派グループの代表を〔党〕委員会に送り込むという Berlin 人たちの行動は、全く正当なデモンストレーションであって、路線の諸相異は、

現時点では、本質的な問題ではありません。それと同時に、党費不払いの拒否は、健全な理性の存在を示しており、Rosa に対して痛いお灸を据えたことになります」。

③1916年9月15日付 (KD XII 616)

「カール・エミールの作品にかんしては、その長さを否認すべきではありません」。「もし崩壊理論を救済するローザ〔・ルクセンブルグ〕の試みが黙って見逃されるならば、カ〔ール〕・エ〔ミール〕は正しかったのです」(179頁)。

原文：„Was die Arbeit Karl Emils anlangt, so ist die Länge nicht zu leugnen.“ „Dagegen hat K.E. schon Recht, wenn er den Versuch der Rosa, die Zusammenbruchstheorie zu retten, stillschweigend übergeht, da sie ja auch nicht zu Wort gekommen ist.“

試訳：「Karl Emil の論文に関しては、確かにその長さは、おっしゃる通りです」。「〔すぐ前の文で、Heinrich〔Cunow〕批判の注を付け加えて、彼の議論が純然たる崩壊理論であることを明らかにした方がいいかも知れない、と述べた後〕これに反して K.E. が、崩壊理論を救済する Rosa の試みには、沈黙して通りすぎるとすれば、それは彼女が実際また、発言できなくなっている〔1916年7月10日から再び獄中の人となっている〕という理由からだけでも、正当なことです。〔つまり批判に対して反批判することが、Rosa には不可能になっているから〕」

④1916年12月20日付 (KDXII 627)

「かれ〔Otto Bauer〕の帰還がまだ咎められるという危険はもちろん大そう大きいです」。「平和の提案は一つの歴史的行程です」(181頁)。

原文：„Die Gefahren, denen er〔Otto〕nach seiner Rückkehr ausgesetzt sein wird, sind allerdings sehr groß…“ „Das Friedensangebot war ein geschickter Zug, namentlich auch für die Verhältnisse im Innern.“

試訳：「彼〔Otto Bauer〕が、帰還後にさらされる諸々の危険は、勿論非常に大きなものがあります」。「〔ドイツ政府の〕和平提案は、一つの巧みな手

であり、とりわけまた国内の諸関係に対してそうでした。」

⑤1917年1月31日付 (KDXII 628)

「非常に興味あるのは、ウィルソンの外交とそのとりあげ方でした。この民主的な原理の声明が、まさに初期のドイツとオーストリアの社会主義者によって空想的なものとして片づけられていること、…そしてまた特徴的なことは、連合国側がウィルソンと団結して、『同〔盟国〕』に反対していることです」(182-183頁)。

原文：„Sehr interessant war Wilsons Botschaft u. ihre Aufnahme. Es ist recht bezeichnend, dass diese Proklamierung demokratischer Grundsätze gerade von den führenden deutschen u. österr. Sozialisten als utopisch abgethan wird.... Und wieder bezeichnend, dass im Gegensatz zum „V.“ die Unifizirten sich mit Wilson solidarisch erklären.“

試訳：「非常に興味深かったのは、〔1917年1月22日の〕Wilsonの報告とその受けとめられ方でした。まことに特徴的なのは、この民主主義的な根本諸原則の宣言が、まさにドイツ及びオーストリアの指導的社会主義者たちによって、ユートピア的なものとして片づけられていることです。…そして再び特徴的なのは、„V. [orwärts]“とは反対に統一派の人々〔17年1月7日の Konferenz der beiden Opposition に参加した人々のことか?〕は、Wilson に与する立場を明らかにしていることです」。

⑥<sup>28)</sup>1918年9月8日付 (KD XII 632)

「…もちろん、シュヴァイツァーやバクーニン〔の問題〕はうまく切り抜けているが、メーリングは、もう貴方やアウグスト〔・ベール〕となるとできない」(187頁)。

原文：„Natürlich kommen Schweizer u. Bakunin gut weg, da Mehring

28) この手紙の前に、KDXII 631 (1917年12月3日付)の手紙が吟味されるべきであるが、残念ながら評者は、著者が185頁で紹介している、ロシア十月革命についての Hil. の最初の評価の部分丸一頁を、誤って飛ばして筆写していたため、吟味することができない。

nun Sie u. August nicht mag…“

試訳：「勿論 Schweizer と Bakunin は、『マルクス伝』の中で）大變好意的に扱われています。というのは、Mehring は今や、貴方や August [Bebel] を好まないからです」。

## VI

こうしてわれわれは、本書の終章に至るのであるが、Hilferding 研究者の多くが、『金融資本論』を中心とする理論的問題には関心を示すが、その前提となる伝記的事実の発掘と、それをういた思想史的研究を展開しつつ、Hil. の生涯の伝記をまとめるという困難な仕事には、これまで Gottschalch や Bourdet 等を除いて、誰一人とりくんでこなかった中で、著者が、茨の道を切り開きつつ、Hil. の前半生の伝記をこうして仕上げたことに、評者は深い感銘を受けるものである。評者のように、後から著者の開いてくれた道を進むものは、著者の何十分の一、何百分の一の労苦で間に合う、その有難さを、評者は、自分がヨーロッパに留学してみてつくづく味わった。評者が、本稿のとりわけVにおいて、著者の解説・訳に疑問を呈した場合にも、このことは、いつも肝に銘じていた。

さいごに、こうした伝記的・思想史的研究が、Hilferding の理論的研究に対してもつ意義について、著者の重味のある発言をもって、本稿のしめくりとしたい。

「多くの論者は、『金融資本論』を超えるものをヒルファディングは書かなかったと言う。…しかし、30才台のはじめにこの書を書いたのであり、その後の長い、政治的経験と実践的指導、学問的蓄積を経ながら、書き、報告した論文・演説が、『金融資本論』を超えていないとは簡単に言いきれない。…かれの著作目録も、十分とは言えないが1974年に作られたのであり、実際、人はかれの著述の存在も十分知らなかった。要するにヒルファディングの全作品を通読した人は、現在殆んどいないに近いのである。その状況では、安易にかかる発言はできない」(192頁)。